國學院大學学術情報リポジトリ

神道の連続と非連続：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, エルマコーワ, リュドミーラ, ブロトンス, アルノー, ランベッリ, ファビオ, エバソール, ゲイリー・L, アントーニ, クラウス, 川村, 邦光, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000504

第３回国際シンポジウム

神道の連続と非連続

開会の挨拶

井上順孝（実行委員長）

【井上】時間がまいりましたので国際シンポジウムを始めさせていただきます。このシンポジウムの実行委員長をやっております井上と申します。シンポジウムの開催に当たりましてご挨拶と、若干のご説明をさせていただきます。

この国際シンポジウムは国学院大学の21世紀COEプログラムの一環として行われます。一度ミニシンポジウムも開催していますので、実際は4回目です。この国学院大学のCOEプログラムはご案内のプログラムに書いてありますとおり、「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」という、ちょっと長くてわかりづらいタイトルになっていますが、要は、神道を中心とした日本文化の研究を国際的なレベルで研究するための拠点をつくっていこうと、その拠点づくりに国学院大学が文部科学省から選ばれたということです。

このプログラムの中でさまざまな研究が行われていますが、「神道・日本文化研究国際シンポジウム」というのはその中の１つの重要な柱でありまして、神道の研究者の国際的なネットワークを形成し、神道研究をよりグローバルに広めていくことを目的としております。同時に、このシンポジウムと並行して行われております『神道事典』の改訂英訳という作業、これとも非常に深いかかわりを持っております。この『神道事典』は1994年に日本文化研究所から刊行されたものですが、これをずっと翻訳してまいりまして、本年度から、つまり2005年3月ぐらいにインターネット上でその英訳を順次公開していくことになるかと思いますが、そうした事業等と歩みを一緒にしながらこのシンポジウムを行っております。

何回かご出席された方もいらっしゃると思いますが、今回初めてという方もいらっしゃると思いますので、ごく簡単に、これまでの経緯と、そしてなぜ今回、「神道の連続と非連続」というテーマが選ばれたかをご説明したいと思います。このCOEプログラムは平成14年（2002年）から開始されたわけですが、ちょうど去年の3月に初めて国際シンポジウムを開きました。そのときには「各国における神道研究の現状と課題」ということで、５つの国、アメリカ、フランス、オランダ、オーストリア、韓国から、それぞれ神道研究をなさっている研究者に来ていただきました。それぞれの国で神道の研究は一体いまどのように行われているのか、どのような研究レベルにあるのかを紹介していただきました。そのとき、いろいろなおもしろい紹介があり議論もされたのですが、「それぞれの国で神道研究という分野があるのか」という、非常に根源的な問いが出てきました。

それをずっと引きずりながらも、昨年9月に行われた第2回目のシンポジウムは、先ほど申しました『神道事典』の翻訳を意識して「〈神道〉はどう翻訳されているか」というテーマで行いました。このとき、アメリカ、フランス、韓国という比較的神道文献の翻訳が進んでいる国を中心にパネリストをお招きしましたが、そこでも、「神社とか国学という

ものはどう訳したらいいのか」という課題が提示され、どうしても最後は中心的な問題にかえっていくということがございました。これに関連して12月には、ミニシンポジウムということで、フランスとドイツから研究者をお招きして同じテーマで、近現代の神道の翻訳に関するシンポジウムを行いました。

こういう中に、やはり最初からあったような問題、「神道研究というのはあるのか」ということは、さらに言うと、「神道というものは一体何なのだろう」というふうに、「神道と呼び得るようなまとまったものがあるのだろうか」という問いです。これは国学院の神道文化学部にとってはとても重要な問いなのです。2002年に発足した神道文化学部がありまして、研究者は、神道というのは確固として存在するという前提で研究しているわけです。しかし、国際的な視野から問い直されますと、一体どこが神道で、例えば、仏教とどこが境目であるとか、何がずっと連続してきたといえるのかということも問いとして出されるわけです。そうすると、それにどう答えていったらいいかが非常に大きな問題でございまして、これを避けて、「神道はあるのだ。言葉としてあるし、神社もあるからそれでいいのだ」というふうに答えるわけにもいかない。そこで、今回の「神道の連続と非連続」というテーマが選ばれることになりました。

このタイトルでどういうことを皆さんが想像されるか、連想されるかわからないですが、そのテーマの背後にある我々の意図というのは、こういう基本的な問題に少し手がかりを与えていこうということです。大変大きな問題ですから、すぐ、神道は古代から「あった」とか「なかった」とか言って済む問題ではない。「私はあると思う」、「これはもう新しく近代にできた概念であって、私はないと思う」、「はい、そうですか」と、それで済む問題ではない。連続しているというふうに考える人は、なぜそのような視点が成り立つのかをやはり説明していく。あるいは、「いや、そんなに連続したものとしてはとらえられない」と考える人は、なぜそのように見えてくるのかを説明していただく。そのような作業を積み重ねることによって、いままで我々が簡単に「神道、神道」と言っていたもの。その周縁部分、その曖昧なことをいろいろな要素を含むところ、それがもう少し明らかな形をと

って議論の場に乗せられるのではないか。こういう作業は、やはり神道を国内の研究者だけで論じるのではなくて、グローバルに研究を進めるというときには、どうしても避けることのできないステップだと我々は感じております。そのステップの第一歩として、このシンポジウムを位置づけたいということです。そうは申しましても、どこから手をつけたらいいのかも非常に大きな問題として立ちはだかっています。

今回は、プログラムを見ていただくとおわかりかと思いますが、ドイツ、フランス、アメリカの研究者に来日していただきました。そして、今日本におられるエルマコーワさんはロシア、ランベッリさんはイタリアの方です。5つの国の視点からということにもなっているわけです。本当はもっといろいろな国からと思いましたが、まず第一歩として5ヵ国の方々がどうとらえるかという一つの切り口をそれぞれに提示していただく。それに対して、国学院のCOEプログラムを推進している特に若手研究者の方にコメントをしていただき、それを皮切りに議論をしていこうという計画にしました。その「どこから」という場合に、これは決まった手順があるわけではございませんので、一つはある特定の問題、プログラムでわかると思いますが、例えば熊野の信仰。そのように一つの信仰のあり方を手がかりに、この連続・非連続という問題を議論していくということもあります。

それから、もう少し大きな視点から、いったい一つの宗教が連続しているとか非連続だというときにどのようなことを視点として提示する必要があるのか。これは神道だけではなく、同じ問いは仏教の連続・非連続でも成り立つわけです。あるいは、キリスト教であっても確かに2000 年の歴史はあっても非連続と見なさなければいけない要素はあるかもしれません。そういう意味で、ある宗教は連続している・非連続しているということを議論するときには、連続・非連続の意味も、もう一方では論じなければいけないわけです。つまり、具体的な素材を提示することの作業。もう一方では、それを論ずる視点がどうあるべきかということも出していく。少なくとも、この二つを絡ませながらいくつか手がかりを得ていくことになるかと思います。

今回のシンポジウムは一回で終わるテーマとは思っていませんが、あくまでも5つの発題、それから総合討論を経て、どのようなところが切り口にできるのか、どういうところを最も重要な問題としなければならないか、というところで、ある程度コンセンサスができればこのシンポジウムとしては意義があるかと私は考えております。そのような意図で組み立てましたので、皆さんもぜひそういう手がかり、あるいは、どこが大事なのかを探り当てていく試みに参加していただければと思います。

時間的には、それぞれのセッションに約80分とってございます。前半で発題、そして手短なコメントを経てフロアの方にも参加していただいて議論をすることにしたいと思います。学術的な討議の場でございますので、「いや、私は昔からこう思っているのだ」というような一種の人生哲学にもとづいたような議論は避けていただいて、学術ベースでの議論で質疑応答に参加していただきたいと思います。2日間にわたって、明日参加していただく方もいらっしゃるだろうし、本日だけという方もいらっしゃるかもしれませんが、いろいろと議論していただきたいと思います。中間に休憩の時間がございますので、講師

の方に質問したいときにはこの休憩時間を利用できるかと思います。よろしくお願いいたします。長丁場にわたりますが、よろしくお願いいたします。

それでは、これから後は「セッション1」に移りまして、司会を中井先生にバトンタッチして進行をお願いすることにします。私の挨拶はここまでとさせていただきます。どうもありがとうございました。